



Title	8～10世紀における三十姓タタル=室韋史研究：モンゴル民族勃興前史として
Author(s)	白, 玉冬
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57869">https://hdl.handle.net/11094/57869</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【14】

氏 名	白 玉 冬
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 4 6 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	8～10世紀における三十姓タタル＝室韋史研究－モンゴル民族勃興前史 として－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 森 安 孝 夫 (副査) 教 授 荒 川 正 晴 教 授 桃 木 至 朗

論 文 内 容 の 要 旨

8世紀の突厥ルーン文字碑文に記録された三十姓タタルという民族集団は、モンゴル高原の東端をなす大興安嶺北側のシルカ河流域から満洲西部の嫩江流域を含む広い範囲に居住していたモ

ンゴル系の室韋民族に比定される。本論文は彼らが西方のモンゴル高原へ移動・拡大する過程、特にその一部と見られる九姓タタルがモンゴル高原を占有し、それまで主にトルコ系民族の居住地であったモンゴル高原が、名実共に現在のようなモンゴル人中心の土地になっていく過程を、最大限に復元しようとするものである。

第1章「三十姓タタル＝室韋の登場」では、三十姓タタルという術語が使われた時期の確定と室韋の部族数の変遷などから、九姓タタルは三十姓タタルの一部であると見なした上で、九姓タタルをモンゴル系集団と断定し、その民族系統に関する長年の論争に終止符を打つ。

第2章「8～9世紀における三十姓タタル＝室韋のモンゴル高原南北辺への移住」では、8～10世紀にモンゴル高原南方の陰山地方で活動していた室韋は、これより東の松漠地方に本拠を置いた七姓室韋の一部と見なされるべきことを指摘する一方で、北辺については、8世紀後半までに室韋の翕折部が現モンゴル国北部のフスグル湖・バイカル湖間に、もう一つ別の室韋集団がセレンゲ河の北200里のところまで移動していることを論証する。そして、この2部族を9世紀中葉の北アジア情勢を反映するチベット語文書 P. t. 1283 に記録された Ye-dre 七族と Khe-rgod 族に、さらにはウイグルのルーン文字碑文に記録された九姓タタルに比定する。

第3章「8～9世紀の九姓タタル」では、ウイグルのルーン文字碑文に記録されたウイグルの勃興期の活動から、九姓タタルの住地はおよそセレンゲ河中流以北にあり、彼らとウイグルの関係は、対抗と征服から服属と支配の関係に変わったことを述べる。次に840年からモンゴル高原を支配したキルギス民族のイェニセイ碑銘に注目し、タタルに言及する碑銘の最新の訳注を提示する。そして漢籍史料との比較検討から、およそ870年代に、九姓タタルとキルギスの戦闘が起き、後者は利あらずしてモンゴル高原から撤退したという見方を示す。

第4章「10世紀における九姓タタルと甘州ウイグル王国の同盟関係」では、まずコータン語文書 P. 2741 に記されたタタル人の住地 Buhāthum の考察から、九姓タタルの河西地方進出を指摘する。次に10世紀における肅州の帰属問題を整理したうえで、その領主・司徒から河西節度天大王へ宛てられた公式の手紙文書 P.t. 1189 の作成年代と登場人物の比定をする。そして、本文書中のタタルは九姓タタルと見なしうることから、九姓タタルと甘州ウイグルの同盟関係を明らかにする。

第5章「10世紀の九姓タタルと敦煌を中継地としたシルクロード貿易」では、ウイグル商人が10世紀に残したソグド語・ウイグル語の文書と、11世紀のアラビア語地理書を利用して、当時の沙州・契丹間の貿易ルートが九姓タタルの住地たるモンゴル高原のオテケケン山と可敦城を経由したことを論証し、九姓タタルが広い交通・交易網の中にあったと主張する。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

世界史上に巨大な足跡を残したモンゴル民族の歴史が一定程度判明するのは12世紀後半からであり、それ以前の歴史はほぼ空白とされてきた。9世紀前半まで主にトルコ系諸民族が居住したモンゴル高原が、いつどのようにして現在のようなモンゴル人の土地になったのかという基本的な疑問に答えるためには、特に10世紀前後の情勢が解明されなければならない。中国からのモンゴル人留学生である申請者が強い関心を持つのは、自らの民族アイデンティティとも関わり、12

世紀以前のモンゴル民族史であるが、今回の学位申請論文のテーマに選んだのはモンゴル民族勃興前史としての8～10世紀のタタル民族史の再構築であった。使用史料は漢籍やアラビア語の典籍類、ウイグルやキルギスが現地に残した古代トルコ語碑銘、さらに敦煌出土の漢文・チベット語・コータン語・ソグド語・ウイグル語の文書類である。漢文と古代トルコ語以外は欧米語への翻訳を利用したものであるとはいえ、その積極的な姿勢は評価できる。

論文前半部では、まず九姓タタルが三十姓タタルに含まれるモンゴル系民族であることを明らかにした後、8～9世紀の九姓タタルの居住領域を初めて確定した。従来はもっと東に想定されていたモンゴル系諸部族の西進の最前線を明らかにした意義は大きい。その上で当時の九姓タタルの全貌を初めて学界に紹介し、その対ウイグル・キルギス関係を考察することに成功した。その居住地がモンゴル高原北部にあった九姓タタルは、東ウイグル可汗国の重要な構成要素だった。また彼らが、ウイグルを滅ぼしてモンゴル高原を支配したキルギス族を北方に駆逐した後、モンゴル高原全体の支配権を確保したことを、初めて史料をもって指し示すことができた。

後半部では、10世紀に河西地方（現中国甘粛省北部）にタタルの大集団から成る河西タタル国が存在したという中国学界の通説を正当に否定した。またモンゴル高原に本拠を置く九姓タタルが部族連合国家を形成しており、南の甘州ウイグル王国と同盟関係にあっただけでなく、敦煌の沙州帰義軍政権や契丹国とは時に敵対しながらも、シルクロード貿易を通じて深く結びついていたことを明らかにした。特にキリスト教徒ウイグル商人が作成したと見られる10世紀のソグド語・ウイグル語文書にタタルに関わるものがある点に着目し、且つモンゴル高原のタタルを媒介にした西ウイグル・敦煌・甘州ウイグルと契丹・宋とのシルクロード貿易を浮かび上がらせて、11世紀の阻ト（＝九姓タタル）におけるキリスト教徒王族の存在、12世紀のモンゴルのケレイト族らのキリスト教信仰に繋げた点は、高く評価できる。

全体としては、戦前に我が国のモンゴル史研究をリードしつつも夭折した前田直典が果たそうとして果たせなかった点に切り込むことによって、モンゴル民族勃興前史を再構築する基礎を作ることができた。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。